

我が人生の道標

——ブラジル民族文化研究センターの存在

ブラジル民族文化研究センター会長・古畑 稔

光陰矢の如し言うが、時の流れは早かった。50歳に達したとき私は、これからの人生設計——人生ストーリーを考えるため、それまでの「私の履歴書」、すなわち過ぎ去った日々を振り返った。履歴書は、私に語った。「君の生き方を見直せ」、「君の努力は人並みだ」。私は、自分の人生を「運」に任せて生きてきたとは思わない。しかし、そこで私は、ブラジル民族文化研究センターに、これからの人生の「心の衣替え」のための道標と生命の糧を求めたのである。

【ブラジル民族文化研究センター】（「心の衣替え」道場として）

私と「ブラジル民族文化研究センター」（創設者・主幹：田所清克・京都外国語大学教授）との出会いは、人生最後の折り返し地点、50歳を過ぎてからであった。私は商社に勤務中から、ブラジルの政治・経済・文化について関心を抱いていたので、以前からこの研究センターのメンバーにいずれ入りたいと思っていた。

私の50代は、民間では唯一のブラジル文学、すなわち「学際性のあるブラジルの地域研究及びブラジル学の研究拠点」との出会いから始まった。それから20年ほど経ったが、今も変わることのない、私の「心の衣替え」の場・道場である。

昨年の2008年は、「ブラジルと何らかの関係を持つ者」にとっては、両国の絆を強く意識する年であり、新しい日伯交流の在り方を考える年でもあった。

①日伯交流——100年前の4月28日、ブラジルへの最初の移民781人を乗せた「笠戸丸」が神戸港を出帆し、同6月18日にブラジル・サントス港に着いた記念の年。

②ブラジル民族文化研究センター「創設30周年」

● 田所清克・京都外国語大学教授によって1978年5月に創設された当研究センターは、昨年5月、創設30周年の節目の年を迎えた。創設から一貫して、ブラジルの文化・情報の発信基地としての役割を果たしてきた。現在、日本国内外に24余名の研究員を擁し、出版活動や研究のみならず、講演や語学講座などを通して、広く地域社会に自らの研究結果を還元すべく努力をしている。

●ブラジル移民100周年・ブラジル民族文化研究センター創設30周年記念図書『愛するブラジル 愛する日本』ブラジル民族文化研究センター編、金壽堂出版、2008年6月18日に発刊。

私は、記念図書発行の翌々日の6月20日に、50年の会社生活に幕を閉じた。記念図書は私にとって、会社生活の終演の“祝い花”（花束）であり、会社生活最後の日の20日は、神戸市立博物館で「ルーヴル美術館展——フランス宮廷の美——」を鑑賞し、図録を抱えて帰宅した。この二つの書は、私の「心の衣替え」の糧として書棚に維持している。

【奈良散策】① 奈良をそぞろ歩き、「心の衣替え」を目指す。

私は65歳に到ったとき、70歳以降の人生を老年年少組（70～76歳）、老年年中組（77～83歳）、老年年長組（84～90歳）の三つに区分し、自分の人生を設計してみた。70歳で会社生活に幕を閉じ、隣県の奈良から散策をはじめ、畿内に培われた豊かな物語を探して行こうと思っていたが、実際は二年遅れの72歳にずれ込んだ。それでも奈良に対する憧れは膨らむ一方であった。

奈良県はかつて、「飛鳥時代と奈良時代（平城京）」の二つの時代をへた県であり、世界遺産「古都奈良の文化財」（奈良市）と「法隆寺地域の仏教建造物」（斑鳩町）や、県下の名刹における仏像などは、先人がいまに残した資産である。関西では、奈良・東大寺の修二会（お水取り）が終わらないと本格的な春は来ないといわれているが、四季折々の風景や名刹の寺花などには、数多くの隠れた逸話が残されているのではないかと。それらは無言であるが、その表情には「貴方を歓迎します」と、何かを語りかけているように思えてならないのである。奈良散策は、一人歩きが似合う旅である。奈良の歴史や文化財、風景と花に魅せられた私の、空想と夢の混じりの物語になるかもしれない。しかし、そうしている間は、私の「心の衣替え」を目指す姿勢に迷いはない。

私の「奈良散策」—奈良日帰り散策（観光）は、奈良国立博物館で開催された、講座付きの特別展「西国三十三所—観音霊場の祈りと美—」の聴講と鑑賞からはじまった。奈良行きは、奈良県下の文化財が創建された時代背景を理解し、私の人生の積み残しを一葉でも拾い上げるための散策であり、文化財を単に観るだけに出かけているわけではなく、私にとってはまさしく「心の衣替え」なのである。

来年2010年に、奈良で開かれる「平城遷都1300年祭」に合わせて、奈良・葛城市の當麻寺で開催予定の「奈良・葛城市シンポジウム・21世紀の渡来人」——21世紀の渡来人の定住と教育、観光をテーマとして—のための資料収集のため、私は奈良を訪ねている。このシンポジウムは、葛城市の民営組織「きてみてネット」が主催し、「ブラジル民族文化センター」が共催するものである。

【奈良散策】② 藤あや子さんの歌集の1曲“ふたり花”には、私の人生と重なり合う物語がある。

近鉄奈良駅前の風情はいつもと変わらないが、季節外れの暖かな秋風が興福寺（幸せの寺）のほうへ流れていった。相応の年齢に達し、「老年年少組（70～76歳）」と自称する私は、現在の生活に不満はないが、若い日の夢、そして人生の積み残しを一葉でも拾い上げたく、今日も、藤あや子さんの歌集——『デビュー曲「おんな」から大ヒット「むらさき雨情」、名曲「雪 深深」まで、彼女の代表的ヒット・シングルを集めた豪華ベスト・オブ・ベスト』12曲入り）を携え、奈良の日帰り散策へ出かけた。道すがら、その歌集の1曲である「ふたり花」に、私の人生と重なり合うものを見つけた。

藤あや子さんが歌う“ふたり花”の一節である。

疲れて帰る あなたをいつも
私の心で 慰めたいの
かわす眼と眼の 暖かさ
今の暮らしで 幸せなのよ
明日の夢が 花咲く町を
探して生きたい ふたり花 （Sony Music Records Inc. 作詞：三浦康熙）

老年年少組そこには、二人の自分、過去の自分と現在の自分がある。私にとっては、それが「二人花」であり、歳月を重ねた「二人の自分」である。過ぎ去った日々を、いまの私自身に重ね合わせ、明日への人生設計をすることが、私の「心の衣替え」なのである。すなわち、「心の衣替え」とは、過去を捨てるのではなく見つめ直し、これからの自分の人生のストーリーを考えることである。これが私の生き方であり、私の「心の衣替え」である。

私は、帰路の電車のなかで、この歌集を繰り返し読んだ。歌集は、歌手の人生のA面であり、同時にB面であると思った。A面<（人生喝采—舞台上で歌う華やかさ）。B面<（人一倍の努力、諦めなければ、夢と希望は叶う）。歌詞には、その1曲ごとに物語があり、歌集は、歌手の過ぎ去った日々の人生の追憶として、歌手の人生航路に置き換えられるのではないかとも思えるのである。

三浦康熙さんの作詞、藤あや子さんの歌——“ふたり花”を引用し、使用させて頂きました。大変感謝いたしております。

【ブラジルへの旅】——異文化に触れ合う研修・研究の旅

ブラジル民族文化研究センターは、主幹・田所清克先生と行く「ブラジルの旅」（異文化に触れ合う研修・研究の旅）を企画し、例年・8月下旬から9月中旬にかけて出かけている。ブラジルでは、現地の関係者と交遊や当研究センター研究員とのミーティング、そして「サンパウロ、リオデジャネイロ、サルヴァドール、マナウス、パンタナール」などを巡る地域研究に視点を置いた旅程である。単なる観光ではなく、異文化に触れ合う研修・研究の旅である。

田所先生には、103冊に及ぶ「著書や翻訳書、研究論文類」がある。積年の研究の成果であり、努力の結晶である。田所先生の分身でもあるこの「103冊」に及ぶ業績は、田所先生の人生を綴っている。この業績「103冊」は、机上の研究に留まらず、40数回を超える渡伯によるブラジル地域の研究の成果、当研究センターの運営（PDCA サークル：計画 Plan—実行 Do—確認 Check—処置 Act）が奏功したものと思うのである。

私にとって当研究センターは、出会いから20年ほど経ったが、今も変わる事のない、私の「心の衣替え」の道場である。この間には、ブラジル大使館、財団法人・日伯協会を始めとする方々との出会いもあり、交遊の広がりを得た。当研究センターの研究員や学生の方々には若さを貰った。当研究センターにも、出会いと別れがあった。旅立って行った彼らの姿をも見てきた。その努力が蕾となり、社会ニーズに適合した花に開花したのであろうか。

【終わりに】—真の努力とは何か。識者の意見を聞こう。

① [曾野綾子氏] の意見。

「他人に過酷な労働を強いることはできない。しかし確かにプロの修業というものは、すべて一小説家の書くという仕事さえ一過酷である。そしてプロというものは、それに耐えた人だけが到着する境地で、平等の結果ではない。」産経新聞・日刊 平成 21 年 6 月 3 日。■335 「透明な歳月の光」

② [小山薫堂氏] (映画『おくりびと』の脚本家) の意見。

「僕はいろいろな人から運がいいと言われるのですが、それだけではなく、やはりいつも何とかチャンスをつかもうとアンテナを張っている。そして小さなチャンスを自分に引き寄せたり、たどり着いたりする意識を持ち続けています。幻冬舎という出版社を経営する見城徹さんが『これほどの努力を人は運という』とよく言ってらっしゃるけど、まさに水面下の努力は人には見えない。成功した結果だけ見て運がいいからだと考えてしまう人は、実はまだ努力が足りてないと思ったほうがいい」。朝日新聞・日刊 2009 年 6 月 14 日、[朝日求人] 仕事力「誰かを幸せにしよう」。小山薫堂が語る仕事—④